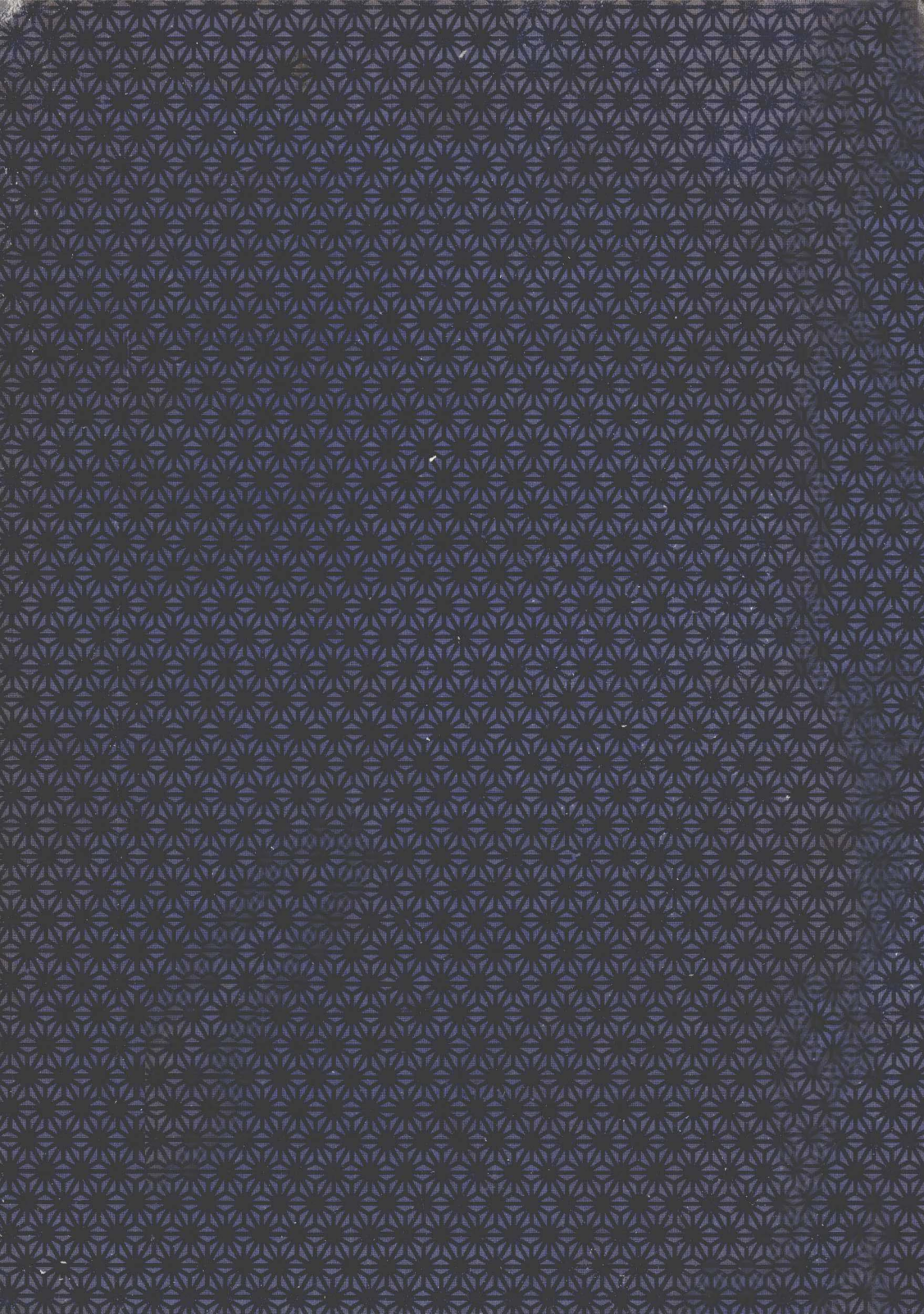




監修 大佛次郎 川口松太郎 木村毅

衆文学大系

26

鷺尾雨工
海音寺潮五郎
山本周五郎



大衆文学大系 26

鷺尾雨工 山本周五郎 集
海音寺潮五郎

昭和四十八年六月二十日 第一刷

著者 鷺尾雨工 海音寺潮五郎 山本周五郎

装幀者 田中一光

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二―二二一 郵便番号一二二
電話東京(〇三)九四五―二二二 (大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 三四〇〇円

◎鷺尾倫子 海音寺潮五郎 清水きん
落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

目次

鷺尾雨工集

覇者交代

五

海音寺潮五郎集

茶道太閤記

三

柳沢騒動

四七

山本周五郎集

日本婦道記

六三

年 解 解
譜 題 說

合 合 合

鷺尾雨工集

覇者交代

愛童

一

「あゝ危いぞよ、お乱！」
と、信長は声をかけて、

「転ばぬようにせい」

そう注意をあたえたのは、さも美味しそうに色づいた蜜柑を、小山のように積んだ広蓋を、重そうに捧げて、嬌なよと搬んできた愛童お乱の、世にもすぐれた艶すがたが、いまさらの如く信長の愛情神経を、そよったからであった。

ところは岐阜城。

安土の城が、築城工事のさいちゅうで、信長はまだ移転をしなかつた四十三歳の正月のことだ。

お乱すなわち森乱丸は、そのとき十二歳であった。
容姿端麗な小姓なのである。

統よりも細やかな、そして雪よりも白いような白皙の膚に、ほんのり薄化粧が匂い、聡明さを蔵した眼に、黒水晶のように輝く眸――。

齡こそ十二でも、もはや盛りの若衆ぶり。森の定紋、鶴の丸を染めぬいた華美な振袖を着て、たれが見ても搬ぶのは無理だと思われるほど蜜柑を満載した大広蓋を、いとも重たそうに、信長の座所へ、はこび入れようとしたのである。

「そんなに重いものを、お乱、そちが態々運んで来ずとも！」

信長は、微笑しながらも眉をひそめた。

蜜柑は、紀州根来の僧院から、土地の名産として献上した見事な品だ。

この本場蜜柑の山と積まれた広蓋は、華奢な乱丸には、いかにも重たそうには見えたが、それはほんの見かけだけのことで、本人は一向重いとは感じなかつた。

まったく見かけによらない不思議な力の持ち主は、このお乱だった。女子よりも優形な体のどこに、そんな力が、匿されているのか、ひそんでいるのか、じつに面妖しごくであったが、面妖といえ、怪力だけではなくて、剣術といい、槍術といい、馬術、水練、なに一つ、武術で出来ないというのがない。おまけに心の持ち方も頭の働きたも、ずばぬけて優秀なのだから、これこそ生まれつき具わる天賦の天才というほか、なかつたのである。

だから実は、重くも、危くもないのだが、信長が、いま、「重いものを――」と、云ったので、見かけだけは猶さら重たげに見せた。

そして、「危いぞよ」と、そう信長の云った注意の言葉が、いかにも適切らしく、よろ／＼と、よろけた。

「それ、危いと申すにッ！」

主君に、ふた／＼び云われたとき、

「いゝえ——」

大丈夫でございしますと答える代りに、たちまち乱丸は、つい足を、ふみすべらしたかのように、お次ぎ座敷のまん中ほどで、がくりと膝をついたかと思うと、くるりと横ッ倒しに、つッ転げたではないか。

「呀っ！」

広蓋の蜜柑の山はくずれて、

ころ／＼、ごろ／＼。

青畳のうえに、散乱した。

「わッはッは／＼、云わんことでない！」

信長は、大きな声をだして笑った。

「まあ、いかゞ致そう！」

お乱は身を起して、

「とんだ不調法をつかまりました。どうぞおゆるされ、下さいませ！」

二

はずかしそうに、

「ごめん遊ばせ」

と、目のふちや、耳朶を、ぼろ／＼と紅めてお辞儀をした乱丸は、散らばった蜜柑をひろって、ひとつ一つ、それを袖口で拭いて広蓋に積み直した。

その仕料しりょうといい手つきといい、やはり女子に擬うしなやかさだ。

「そんなに、一々拭わなくてもいゝ」

信長はむしろ、上機嫌で、心地よげにほゝえむのだった。あくる日。

おなじ近習のひとり、長谷川竹丸が、

「昨日は、ご前で、お転びだったそうなのと云った。」

「ほんとうに館やかたさまの、仰しやるとおりでした。どうしてあんなに、お目さきがお利き遊ばすのでしょうか。わたしの転ぶのを、お見とおしなのです。あぶない、転ぶぞよと仰しやるが否や、すべったのやら、つまずいたのやら、わたしはもう夢中で、お蜜柑と一しよに転がってしまったのです。顔から火が出そうに、羞かしかった」

お乱は、そう答えた。

朋ばいに対しても、やはり女性的な言葉づかいをしたし、口さきだけでなく、真から羞かしそうに見えたのである。

竹丸は、つゞけざまに頷いて、

「まったく館さまのお見込みは、なんによらず、はずれるということは無さそうじゃ。さすがは天下人とおなりのお豪ごうさだとおもう。——しかしお乱どの、そもじは何も、さまでに羞じらうには及ぶまいに」

「でも、わたしは……」

と、独特な媚態をつくる。

しん底、羞かしそうだ。

だが勿論、それは巧みな見せかけで、

心のうちでは、

(おもった以上に、滑らかにいったようだ)

ふんわりと北曳きたひきえまれた。

——こんな些細なことでも、館さまの御眼力の微塵も違わな

いという印象を、ぐるりの人たちに擦しつけければ、いろ／＼な効果がある、うまれてくる。

乱丸は、そう考えたのだった。

岐阜の城から信長が、安土の新らしい城へ引越したのは、翌二月。

それから間もなくであったが、信長は、(本願寺を、やっつけるには、どうするのが早道かな?)

思案に耽りながら、木の香の芳しい新築の厩のなかで、ふと眼を、下窓の連子格子へむけた。

下窓のわきには香炉があつて、焚かれている香の煙が、うす紫に、かすかに棚びいて、その煙のすえが、連子の隙から、外へ流れ出ている。信長の目は、煙の流れを追うた。

「おや？」

香煙の末が、白魚のような綺麗な指さきで、遮られた。いや、遮られたのではなくて、煙の流れは、そこで消えたのだ。

「お乱のやつ、何をしている？」

美しい指先は、こまかに動いていた。

指先のほかには、朱鞘が見えるだけ。

朱鞘は、信長自身の佩刀で、河内の名工、信国の作だ。

朱ぬりの細かい刻み鞘に納めてあるのを、お乱は捧げ持つて、厩から出てくる主君をまつている間に、その刻み目の数を丹念に、かぞえていたのであつた。

信長の胸に、一つの試みが思いつかれた。

(やつて見よう)

三

おおぜいの近習を集めて、

「この朱鞘は、予の秘蔵の信国じゃ。だが今日は、これを懸賞

に出すぞ」

信長は、見まわして、

「みな、各自に、云い当てゝ見よ」

と、れいの持ち前の語法で云つた。いきなり結尾の方から云つたり、または中途を跳び越したりするから、よほど明敏に頭をはたらかせないことには、たいがい鳩が鉄砲だまに驚いたみたいな顔をしないでならぬ。

「なにを申し当てるので、ござりまするか？」

長谷川竹丸が、まず主君に伺いを立てた。

もとは、お竹と呼ばれたのだが、元服して前髪に中刺を入れたからは、おの字が除れて、竹のあとに丸がつく呼称に変わっていた。お乱よりも七つほど年上の十九歳で、そのころの近習のうちでは、ごく年嵩の方だった。

「この刻み目の数を、云い当てるのだ」

信長は、そう答えて、

「正確に当てれば、刀を相違なく遣わそうぞ」と、付け添えた。

竹丸以下近習たちの眼は、いずれも光った。刀はしさに胸が、ときめく。

けれども——およそというなら兎もかく、正確に、びたりと当てることは、とても難かしらう。そうは思われても、先だつものは慾だった。

突ッばる慾の皮が、

「あたるも八卦、あたらぬも八卦だ。やつて見よう——まぐれ当たりということもある——」

と、気おい立たせた。

あてずっぽうで射とめろ、という射倖心が一座を支配した。

世の中には僥倖心のない者は稀だから、

「われこそは！」

と、敦圀く。

「予が名さすゆえ、指名される順に答える」

「はッ！」

目が、ぎらつくし、鼻息が荒くもなる。

「館さま」

と、小倉松寿丸が、

「ちょっと伺いまするが、その刻み目の数を——^{かみ}上は、ごぞんじなのでござりますか？」

と、訊ねた。

「おたんちん奴！ 知らないでか」

信長は、莞こりした。

松寿丸が、そつと歯がみを噛んだのは、
(あゝ数えておけば宜かった！ その気なら、なんでもなかったのに！)

と、思ったからだ。

「お松」

「はい」

「一ばんは其方だ。いくつか？」

わざと意地わるそりに、微笑すると、

「えゝとう……」

しばし、どぎまぎしてから、

「三百と——三十三本！」

と、思いきつて云ってみた。

「はッは、三の三つ並びか」

信長が、呟いた。

松寿丸は、

(多すぎたかな？ それとも足りぬか？)

どの途、おッばずれたらしいと、ふたゝび歯がみをした時、

「つぎは虎じゃ、いくつ？」

「は。二百四十九本」

高橋虎丸が、そう答えた。

「ふゝゝこれも半か」

と、信長が云った。

(はてな？ 丁の数かしら)

四

「竹、そちはどうじゃ？」

(そら来た！)

長谷川竹丸は、かねぐ一振欲しいと思つていた信国の太刀が——しかも上様ご秘蔵の品が、うまくさえ当たれば自分のものになるのだと思つと、この一座では一ばんの年高であることも忘れて、ずんと若い人たちと少しも違わず胸が躍った。

「上様は、これも半かなどと、さも丁の数でなければ当たらぬみたいに仰せられたが、しかしあれは却って肩唾らしい。きつと逆なのだ。半にちがいない」

竹丸は、主君の膝のうえに横たわっている太刀の朱鞘を、じいっと見まもった。

「ひどく細かい刻み方だ。ひと刻みの幅が、一分とすると——あの信国は、たしか二尺四寸五分と記憶している。刀身よりも鞘が、一寸だけ長いとすれば、二尺五寸五分だ。一寸の二十五倍半だから、刻み目の数は——」

と、胸算をして、

「はい。二百五十五本かと存じまする」

「わッははは！」

だがこの信長の笑いが、なにを意味したかは、ひとり乱丸を

除ければ、たれにも解せなかった。

「つぎは愛じゃ。いくつか？」

愛と呼ばれたのは、小河愛丸、生年十五歳。もしもお乱なかりせば、随一の美童だったにちがいない。

「どうせ駄目だ！」

見きりをつけながらも、

「は。二百と四十四本」

と、まったく出鱈目に、だが丁の数で答えた。そして答えてしまつてから、

（もうすこし考えればよかった）

と、後悔のほぞを噛んだ。もっと主君の座との距離が近くて、朱鞘の刻みが明瞭と見えでもすれば、推算の標準も立つが、さもなくば格別考え様のないものを、それが有りそうに思えた。信長は、お乱の順番を、あとまわしにした。いろんなのはずれの答えの最後に、お乱の数だけが、ものの見事に的中することを考えると、愉しかった。それが、びたり当たるから、この太刀が、お乱のものになる。そのときの自分の愉快さと、お乱の悦びの大きさを思うと、鵜尾が妙に疼いた。

つぎ、つぎと、順番が進んだ。

どの答えも、すべての違いで、ついにお乱の番が来た。

「そちは？」

「はい」

「申せ」

信長は、堪らないほどの幸福感に、まさに浸りかけた。すると、乱丸が、

「わたくしには、とんと見当さえ、つきかねます——」
と、云った。

「なに見当がつかぬと？」

ぎくりと、呆れた眼を睜みはつて、

「そんなことがあるものか！」

「いゝえ、申上げられませぬ」

「いゝや申せ！」

信長は、俄然失われた幸福を、とり戻そうと焦りつゝ、声を苛いらがらくした。

「そんなら申上げまする」

「む！　いくつ？」

「わたくしは……」

こゝだとはばかり、故意に、いわば海棠が露を帯びたように羞恥を、たゞよわせて、

「あのう、刻み目の数は……それを数えてみて、心得ておるの
でございますゆえ、たゞいまのお当て物のお仲間入りは、ご遠慮いたしまする」

と、答えた。

五

——案外。

（当てものの当てごとが、見んごと外れおったぞ、ちえ！）

苦ッばく、信長は心のなかで、ひとり語ちたが、思いきや、ぐうんと自分の意表を突破したお乱を、怒る気にも、呶鳴る気にも、なれなかった。もしかこれが他の者だったら、かならずや小癪さかな、なにをツと頭かしらごなしに雷を叩きおとして、不愉快千萬なおもいをしたにちがいないのであるが、そこはそれ、目の中へ入れて、掻き廻しても痛くないほど可愛いお乱のことだから、腹が立つて顔がむくれる代りに、舌を捲いて、おう、いみじき奴よ、天才じゃと、やみくもに感心したのだった。

むろん桁外れに超凡で、異色独尊な英雄信長ゆえ、決してお

乱が、偽らずに正直に云った点などに感心したわけではなかった。

（おれほどの人間の、思わくのかのそとへ、出おる奴は、こやつ以外あろうか）

感歎の焦点を、そこに置いてみると、

（やがて後に、どんなに偉くなるか解らん。じつに娛しみの掛かる奴じゃ！）

と、思わずにいられないのであった。

（猿面の奴も折には、ちよびり予の意表外に出るには出るが、お乱みたいに、斯うも鮮かにはいかん）

秀吉よりも、お乱を一層高く評価した。

この評価に用いた物指は、果して間違っていたであらうか？これを間違っていたと考えるのは、合理的だ。しかしながら、間違っていないかつと見做す観方も、けつして不合理ではない、という逆説も成り立つ。

「どうじゃ皆の者」

と、信長は、懸賞を、まるで別な性質なものに變更へんがえてしまふ積りで、

「正直は、人間の美德だということは昔から、口の酸すっぱくなるくらい、云われているし、卑怯が面よごしなことも、耳胼みみかたものだらう」

そう前置きをして、

「だが却々、いまのお乱のように出来ぬものじゃ」

しごく平凡に、正直を賞めたのは、手ツとり早く、誰にも解り易く、異存や故障の出端を封じて、不服を蔭でも云わずまいという肚だった。

「そちたちは、お乱を見習わなくてはいかんぞ。朱鞘の信国は、あらためて、お乱へ遭わす」

懸賞の太刀は、乱丸の手にはいった。（てへ、なにが改めてだ！）

しかし云い当てたらという条件を、みたしたのは一人も無かつたのだから、不平の持つて行き場がない。

乱丸が、かぞえたことを伏せておいて、当て物をあてれば、それッきりなのであるから、どのみち、太刀は、この美童の所有になるように運命づけられていたのだと、そう諦めるよりは、かは無いのであった。

それから数箇月の後。

三たび目の心理試験がおこなわれた。

「茶席の、障子が開いているから、閉めてこい」

そう、信長は云いつけた。

畏まって、行ってみると、障子は閉まっていた。

（なるほど！）

お乱は領きながら、そつと障子を開けて、それから強く、びやりつと閉め、音をひびかせて戻った。

「障子は、開いていたであらうが？」

真顔で、信長は訊ねた——念をおすように。

六

「はい、御意のとおりでございました」

「だが、お乱、あの障子は、しまつてはいなかったかな？」

「いゝえ、仰しかったとおりでございました」

「閉まっていた筈だがな？」

「いゝえ、それは上様の思召しがいでございまする」

「そうではあるまいが。そちの思いがいではないか？ 障子が開いておつたと考えたのは、ひょつとした予の勘ちがい、じじつは閉まっていた」

「いゝえ、閉まっていたと思召すなら、それこそひょっとしたお勘ちがいでございます。たしかに障子は、開いておりましたゆえ、お乱めが、閉めてまいったのでございます」

「そちの思惑ちがいらしいぞ、わッはッははは！」

「それは、上の思召しちがいでございまする」

と、仄（よこ）わらった。——いわば、なまず問答、こんにやく問答の類いで、これでは、きりも、けりも、句読点も終止符も附かなくなる。

だが、信長は、そこが気に入ったのであらう、最も男性的な太い低音で、豪宕な英雄わらいを笑うと、お乱もまた妖治（まじ）というほかないような、なまめかしい中次音で、媚やかに笑ひ和するのであった。

がんらい信長という人は、きわめて屢々他愛なく見えた英傑だった。

他愛なく、わざと見せることもあったし、なんの飾りッ気も技巧もなしに、ほんとうに他愛なく見える場合も、ずいぶん多かったが、いづれにもせよ、愚にもつかないことを、云ったり行なったりした。

それに対して、呼吸をどう合わせるか。

その合わせ方ひとつで、惻巧と、馬鹿が、きまった。

調子があれば惻巧もの、あわなければ馬鹿ものと、信長の頭のなかで分類された。で、この分類によると、惻巧ものの天辺には、もう長いあいだ秀吉が——草履（くさつ）の猿（さる）らしい、木下藤吉郎を経て、げんざいの羽柴筑前守にいたるまで、ずうっと立ちつゞけていたし、また馬鹿ものの方のどん尻には、明智光秀が、どっしりと坐っていた。

一ばん賢いのと、一ばん馬鹿なのとの間には、じつに数おおい段階があつて、麾下の臣のいろんな人物が、それ／＼の段階

に、立ったり、すわったりしていた。だが、ちょうど嵌まった人物のいない段階は、空のまゝで、だれをも置かなかつた。それが信長の流儀だった。

惻巧なのが愛され、馬鹿なのが憎まれたことは、いうまでもなかった。

しかしながら、この愛憎は、感情の表れであつて、信長の理智は、これとはまた別個の働き方をしていた。

信長の理智によると、愛するもの必ずしも有能でなく、憎むもの敢て無能、無為でなかつた。

つまり、馬鹿のどん尻りに据えた明智光秀を、けつして凡庸低劣な武將だと考えているわけではなかつた。光秀の特徴、光秀の材幹を知るものおそらくは信長以上の人は、なかつたであらう。信長が光秀を愛さなかつたのは、馬鹿の骨頂と考えたからであつたが、それにも拘らず光秀は、信長から充分に優待された。信長のいう馬鹿は、自身との関係においての特殊な馬鹿で、ひろい世間との関係における一般の馬鹿とは、まるで異なるものだった。

これを云いかえれば、光秀は、どこへ出しても堂々たる、立派な武將だが、たゞ信長の前だけでは馬鹿の張本だったのである。

七

明智光秀の技能、材幹を、じゅうぶんに信長が認めた証拠には、織田の家譜代の重臣たちを、のりこえて光秀は、おおきな大名に取立てられた。また京都の市内市外の行政を委任された。

この京都での役目は、岐阜あるいは安土にすむ信長の、いわば全權大使ともいえるような重い任務だった。

光秀は、京都を中心とした外交をも、委任された権限内で、とりはからっていた。織田家を代表する光秀の署名で、重要文書が出された。

安土に信長の本城が築かれることになったとき、その縄張りをしたのは光秀であった。

安土城の設計者であり、京都における代表者であり、そして有力な大名として、その桔梗の旗風は、山陰道を靡かせようとしていたという、この三つの事実だけでも、光秀の位置と力とが、はつきり解る。

信長は、それほど充分に、光秀を待遇した、だがそうした待遇と、馬鹿だと罵るということは、はなはだしい矛盾だ。

矛盾にはちがいないが、それを矛盾だと思わないところに、信長の絶倫な偉さと、同時に最も大きな欠点とがあった。

日本の歴史上、信長ほどの我儘者はなかったであらう。信長くらい自尊心の強かった人も絶無だろう。自分と息が合わないというだけのことで、光秀のような英傑を、頭ごなしに、

「きんか！」

すなわち「禿頭」と呶鳴り、

「馬鹿野郎っ！」

と、叱りつける。

そして揚句の果が、

「屎ッ、くたばれ！」

とまで、口ぎたなく罵倒した。

(嫌いだ。憎いやつ！)

と、おもえば、何人をも容赦しない代りに、

(気に入った。可愛いやつ！)

と、なれば、まったく誰に遠慮も、気兼ねもなく、草履とりの下郎をも一足とびに大名にするし、変性若衆の、しかもわずか

十二歳でしかない森お乱でもが、これもまた筈棒な出世が、一氣に出来そうな空氣になっているのだった。

すると、そうした空氣を一層醸成させるような事柄が生じた。

お乱の十三歳のときのことだが、ぐら／＼と大地が揺れ出して、さしも頑丈普請の大建築である安土城内の建物も、つぶれそうに動いた。

「それ大地震だ！」

と、近習どもは、われさきに庭へ跳びだした。

濃尾地震帯というから、地震は岐阜のほうが本場かもしれぬが、安土も琵琶湖の畔で、近江地溝の三角洲と断層の構造線の上になつてゐるから、地震に対しても、あながち場ちがいでない。

色を失して近習たちは逃げだしたが、お乱だけは逃げなかった。

それは信長が、泰せんと坐つたまゝでいたので、お乱も、そばに端坐して、うごかなかった。

さいわい地震は、建物を潰すほどではなかった。

「これしきの地震に、とり乱すということがあるかッ、阿呆っくめら！」

信長は、戻ってきた近習たちを、呶鳴りつけた。

「すこしお乱の真似をしたらどうだ？」

八

近習たちは、あとで私語いた。

「戦場ではあるまいし、逃げたとて、いゝではないかの」

「筋が、とおらんよ。敵にうしろを見せたのではない。潰れるかもわからぬ御殿に背ろを見せたのみじや」

「天井梁の下敷きになって、圧しつぶされるのが、なんで忠義かよ」

「取乱すなと仰有るのは御無理だよ、逃げるとなればお品などつくっておれるか」

「そうとも。お乱、お乱と仰せだが、あれでよいものかのう？」

「お乱のことなら、黒いことでも、白いことだと仰有る」

「こと／＼くだ、あれでお乱の名前どおり、いつかは乱も起るだろう」

「しっ！ 声が高い！」

「壁にも耳がある！」

「よけいな洒落は云わぬことだ」

「わたしたちが怎う氣を揉んでも、あせっても、おツつきはせぬのじゃ」

「さよう左様、なるようにしか成らぬのだ」

お乱にたいする殊寵は、他の近習たちの羨望などを、はるかに超越していた。

信長の座所には、お乱のほかには誰も見えなかった。

「上さまは、地震をお好きでいらっしやいまするか？」

「なに、地震を好きかと訊くのか？」

信長は、妙な質問だと思ったのである。

「どうやらお好きらしい」

「好きなものか」

「お匿しあそばしまするな」

「匿しはせぬよ。地震は一番嫌いなもののひとつじゃ」

「ほんとうに、左様でいらっしやいますようかしら？」

「こいつ、変な疑い方をするぞ」

「ではあの、御殿のお梁木や、お屋根の落ちた下で、お怪我を

あそばしたり、事によったら、尊いお生命までも怎うかあそばすことなどは、好きではなかったのでございますか？」

「わッはは／＼此奴め、諫める積りなんだな！」

よほど可笑しかったか、氣に入ったのか、さも心地よげに、

腹を抱えて、身体を揺すらがせた。

「いゝえ、お乱めが、たゞ心得のために、上さまのお好き嫌いを、お伺いいたしたまででございます」

「うッふ、よし／＼！」

おおきく、信長は頷いて、

「この次ぎの地震には、それが大地震なら、たとい家屋が潰れる怖れはなくても、予は、まッ先に避難するぞ。そちも後れずに逃げるがいゝ」

そう云うと、お乱は嬶やかに頭をさげて、

「はい。お言葉にしがいます」

と、答えた。

信長は、やがて近習どもを集めて、

「おれは先刻、これしきの地震にとり乱すということがあるかッと云ったが、あれは誤りであつたから、只今とり消す。向後あれくらいな地震があらば、いずれも我がちに逃げ出すがよいぞ」

と、云いきかせた。

聞かされた者たちは、眉に唾を塗りたいような氣がした。

みんな顔を見合せていると、信長は、なんの説明もせず

に、さっさと引ッ込んでしまった。

それから兩三日して、

「お乱よ、こないだの地震諫めは、じつに佳かつたぞよ」

「はア、お乱めは、お諫め申上げたおぼえなど、ごさいませぬ」

「ふふふ、諫めたと云われるのが厭なら、おれの胸へ、一本、釘を打ったでもいゝ」

「あのようなことを！ なおさらわたくし、身におぼえの無いことをごさいまする」

言葉づかいも、身のこなしも、女子にまさる嫺やかさを含んでいた。

「はッはゝゝ、そちの身におぼえはなくとも、こっちの胸には、ずんと応えたぞ。じつに良く利いた釘であつたよ」

そう云うと、わきから、若い側室の、お富宇の方が、

「上のお胸に、そのような釘とやらを、お乱どのが？」

と、さも興味ふかげに、上目づかいをした。

「むゝ、痛かつたよ」

「まあ上さまが……？」

「だが小気味よく痛かつたのだ。あゝいう痛さなら、信長は大好きじゃ」

工事が落成したばかりの二の丸曲輪くわだった。安土の城普請の大土木は、まだ進行中で、出来あがつたのは、本丸と、二の丸のみだったが、側室お富宇の住まいは、この二の丸の曲輪うちに設けられてあつたので、信長は、いまでもお乱に太刀を持たせて、本丸から、通ってきたのだ。

お富宇は、かず多い側室のうちで一ばん年が若かつた。

「どんなお釘なのでございますの？」

わかい側室が、たずねると、

「こんなのだ！」

「あアら！」

「五寸釘よりも太くて、尖きざが針はり以上にも鋭いのだ」

信長は、微笑してから、こんどは真顔で、

「つい此の間の地震のときよ。あとでお乱が、おれを諫めたその諫めかたが、いかにも水際立みぎはだちつて鮮かだったのだ。信長が感心したのだ。参つたのだ」

お乱が、言葉を挟んで、

「もうそのようにお賞めにあずかりましては、わたくし困つてしまひまする」

と、云つた。

「まあ黙つていろ」

そして、お富宇へ、

「あんな場合——ほかの者なら、千金の身は巖牆がんきやうの下に立たずとか、地震のごとき天災をさけないのは、暴虎馮河ほうか、すなわち匹夫の勇のみとか、おおむかしから言い古され、使い旧ふるさなかつた文句を並べる。ところがお乱の奴は、さすがじゃよ」

「なんと申上げたのでございますか？」

「いきなり、云つたのだ」

「どうなんでございますの？」

「地震におツつぶされて、べちゃんこになつて死ぬことが、どうも好きらしい面だ」とさ

「あれ？」

「この信長の面が、そう見える」とよ

「まアおひどいことを！」

「あッはゝゝ、おれもびっくり度胆どたんをぬかれてな、ばかめ、そんなことが有るか？」と、唖鳴りつけたが、ちっとも怯おそまず

「」

お乱が、

「上さまッ！」